
レ・ミゼラブル
ユ ゴ ー

佐藤 朔訳

新潮

レ・ミ ゼ ラ ブ ル I

ヴィクトール・ユゴー

佐藤朔訳

世界文學全集 6 新潮社版

世界文學全集 6

レ・ミゼラブル I

ヴィクトール・ユゴー

◎佐藤 朔

1962年5月1日 印刷

印 刷 所・凸版印刷株式会社

1962年5月5日 発行

製 本・大進堂製本所

発行者 佐 藤 亮 一

本文用紙・王子製紙株式会社

発行所 株式 新 潮 社

函貼・カバ・特種製紙株式会社

東京都新宿区矢来町71
TEL(341)7111(代)

表紙布地・望月株式会社

振替 東京 808

定価 290 円

<落丁・乱丁本はお取り替えいたします><Printed in Japan 1962>

目 次

第一部 ファンチーヌ

第一章 正しい人

1 ミリエル氏	9
2 ミリエル氏がビヤンヴニュ閣下となる	14
よい司教に厄介な司教区	17
ことはにふさわしい行為	19
ビヤンヴニュ閣下が法衣を着古し	21
たこと	25
かれの家をだれに守らせたか	26
クラヴァット	34
酒のあとの哲学	37
妹の語った兄	41
未知の光明に面した司教	45
一つの制限	57

第二章 転 落

1 一日中歩き回った夜のこと	1
2 賢明な人に用心をすすめる	2
受け身の服従の雄々しさ	3
ポンタルリエのチーズ製造所についていろいろ	4
平 静	5
ジャン・ヴァルジャン	6
絶望のどん底	7
波と闘	8
新たな被害	9
目をさました男	10
かれがしたこと	11
司教ははたらく	12
ブチ・ジエルヴエ	13

第三章 一八一七年に

1 黒玉細工の進歩の話	177	1	一八一七年	131
		2	二組の四重奏	136
		3	四人と四人	141
		4	トロミエス愉快になりスペインの歌をうたう	145
		5	料理店ボンバルダ	147
		6	うぬぼれの章	150
		7	トロミエスの知恵	151
		8	馬の死	157
		9	歎歌のたのしい終わり	160
		10		
		11		
		12		
		13		

第四章 委託は譲渡となることがある

1 母と母の出あい	174	1	マドレーヌ ラフィット銀行への預金額	179
2 うさんくさい夫婦の手初めの素描	172	2	喪に服したマドレーヌ氏	182
3 ひばり	163	3	地平のかすかな光	185
		4	フォーシュルヴァンさん	187
		5	フオーシュルヴァンがパリで庭番	193
		6	になる	196
		7	ヴィクチュルニヤン夫人が道徳のために三十五フラン使う	197
		8	ヴィクチュルニヤン夫人の成功	200
		9	成功のつづき	203
		10	「キリストはわれらを救い給う」	208
		11	バマタボワ氏の無為徒食	209
		12	市の警察のいくつかの問題の解決	211
		13		

第六章 ジャヴェール

1 休息のはじめ	221	1	シャンマチウ事件	179
2 どうしてジャンがシャンとなるか	225	2		

第五章 墮 落

1 黒玉細工の進歩の話	177
-------------	-----

1	マドレーヌ氏はどんな鏡で自分の 髪をながめたか	スコーフレール 親方の眼力 頭のなかの嵐
2	幸福なファンチーヌ	試練にたった修道女サンプリス
3	満足したジャヴェール	旅人は到着して、すぐに帰り支度 をする
4	官憲が権力をふたたびとりもどす	特別入場
5	マチウ	有罪の決定がなされている場所
6		否認の方式
7		いよいよあっけにとられたシャン
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44		
45		
46		
47		
48		
49		
50		
51		
52		
53		
54		
55		
56		
57		
58		
59		
60		
61		
62		
63		
64		
65		
66		
67		
68		
69		
70		
71		
72		
73		
74		
75		
76		
77		
78		
79		
80		
81		
82		
83		
84		
85		
86		
87		
88		
89		
90		
91		
92		
93		
94		
95		
96		
97		
98		
99		
100		
101		
102		
103		
104		
105		
106		
107		
108		
109		
110		
111		
112		
113		
114		
115		
116		
117		
118		
119		
120		
121		
122		
123		
124		
125		
126		
127		
128		
129		
130		
131		
132		
133		
134		
135		
136		
137		
138		
139		
140		
141		
142		
143		
144		
145		
146		
147		
148		
149		
150		
151		
152		
153		
154		
155		
156		
157		
158		
159		
160		
161		
162		
163		
164		
165		
166		
167		
168		
169		
170		
171		
172		
173		
174		
175		
176		
177		
178		
179		
180		
181		
182		
183		
184		
185		
186		
187		
188		
189		
190		
191		
192		
193		
194		
195		
196		
197		
198		
199		
200		
201		
202		
203		
204		
205		
206		
207		
208		
209		
210		
211		
212		
213		
214		
215		
216		
217		
218		
219		
220		
221		
222		
223		
224		
225		
226		
227		
228		
229		
230		
231		
232		
233		
234		
235		
236		
237		
238		
239		
240		
241		
242		
243		
244		
245		
246		
247		
248		
249		
250		
251		
252		
253		
254		
255		
256		
257		
258		
259		
260		
261		
262		
263		
264		
265		
266		
267		
268		
269		
270		
271		
272		
273		
274		
275		
276		
277		
278		
279		
280		
281		
282		
283		
284		
285		
286		
287		
288		
289		
290		
291		
292		
293		
294		
295		
296		
297		
298		
299		
300		
301		
302		
303		
304		
305		
306		
307		
308		
309		
310		
311		
312		
313		
314		
315		
316		
317		
318		
319		
320		
321		
322		
323		
324		
325		
326		
327		
328		
329		
330		
331		
332		
333		
334		
335		
336		
337		
338		
339		
340		
341		
342		
343		
344		
345		
346		
347		
348		
349		
350		
351		
352		
353		
354		
355		
356		
357		
358		
359		
360		
361		
362		
363		
364		
365		
366		
367		
368		
369		
370		
371		
372		
373		
374		
375		
376		
377		
378		
379		
380		
381		
382		
383		
384		
385		
386		
387		
388		
389		
390		
391		
392		
393		
394		
395		
396		
397		
398		
399		
400		
401		
402		
403		
404		
405		
406		
407		
408		
409		
410		
411		
412		
413		
414		
415		
416		
417		
418		
419		
420		
421		
422		
423		
424		
425		
426		
427		
428		
429		
430		
431		
432		
433		
434		
435		
436		
437		
438		
439		
440		
441		
442		
443		
444		
445		
446		
447		
448		
449		
450		
451		
452		
453		
454		
455		
456		
457		
458		
459		
460		
461		
462		
463		
464		
465		
466		
467		
468		
469		
470		
471		
472		
473		
474		
475		
476		
477		
478		
479		
480		
481		
482		
483		
484		
485		
486		
487		
488		
489		
490		
491		
492		
493		
494		
495		
496		
497		
498		
499		
500		

第二部 コゼット

第一章 ワーテルロー

- | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|----------------------|----------------------|-----------------------------|------------------|-----------|------|-----------|-----|-----------------|------------|----------------------|-----|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 破
近衛兵
局 | ロード
ナポレオン
の道案内 | 意外なこと
モン・サン・ジャン高地 | ナポレオンに悪い道案内、ビュ
ローにはいい道案内 | 皇帝は道案内のラコストにたずねる | 上機嫌のナポレオン | 午後四時 | 戦争の「不明な点」 | A | ウーラ
モント
ル | 一八一五年六月十八日 | ニヴ
エルから来るとき見かけるもの | |
| 368 | 367 | 365 | 361 | 357 | 355 | 349 | 346 | 343 | 342 | 339 | 333 | 331 |

最後の方陣	キャンブローヌ	14
指揮官の価値はどれくらいか?		15
ワーテルローをみとめるべきか?		16
神權説の再発		17
夜の戦場		18
		19
		371
		372
		373
		374
		375
		376
		377
		378
		379
		380
		381
		382
		383
		384
		385
		386
		387
		388
		389
		390
		391
		392
		393
		394
		395
		396
		397
		398
		399
		400
		401
		402
		403
		404
		405
		406
		407
		408
		409
		410
		411
		412
		413
		414
		415
		416

第二章 軍艦オリオン号

二四六〇一号が九四三〇号となる	1	391
悪魔のものらしい二行の詩句が読	2	392
まれる場所		393
足輪の鎖が金槌の一撃でこわれて	3	394
しまったのには、準備工作が必要		395
であったということ		396
		397
		398
		399
		400
		401
		402
		403
		404
		405
		406
		407
		408
		409
		410
		411
		412
		413
		414
		415
		416

小娘ただひとり	6	417
ブーラトリュエルの利口を証明す	5	
るらしいもの		
コゼットが闇のなかで知らない男	7	
と並んで歩く		
金持ちだか貧乏人だかわからない	8	
男を泊める不愉快さ	7	
テナルディエの策略	9	
最善を求めて最悪を手にいれるこ	10	
ともある	11	
九四三〇号がふたたびあらわれ、	10	
コゼットは当たりの番号を引く	9	
	149	431
	428	
	423	
	422	
	421	
	420	
	419	
	418	
	417	
	416	
	415	
	414	
	413	
	412	
	411	
	410	
	409	
	408	
	407	
	406	
	405	
	404	
	403	
	402	
	401	
	400	
	399	
	398	
	397	
	396	
	395	
	394	
	393	
	392	
	391	
	390	
	389	
	388	
	387	
	386	
	385	
	384	
	383	
	382	
	381	
	380	
	379	
	378	
	377	
	376	
	375	
	374	
	373	
	372	
	371	
	370	
	369	
	368	
	367	
	366	
	365	
	364	
	363	
	362	
	361	
	360	
	359	
	358	
	357	
	356	
	355	
	354	
	353	
	352	
	351	
	350	
	349	
	348	
	347	
	346	
	345	
	344	
	343	
	342	
	341	
	340	
	339	
	338	
	337	
	336	
	335	
	334	
	333	
	332	
	331	
	330	
	329	
	328	
	327	
	326	
	325	
	324	
	323	
	322	
	321	
	320	
	319	
	318	
	317	
	316	
	315	
	314	
	313	
	312	
	311	
	310	
	309	
	308	
	307	
	306	
	305	
	304	
	303	
	302	
	301	
	300	
	299	
	298	
	297	
	296	
	295	
	294	
	293	
	292	
	291	
	290	
	289	
	288	
	287	
	286	
	285	
	284	
	283	
	282	
	281	
	280	
	279	
	278	
	277	
	276	
	275	
	274	
	273	
	272	
	271	
	270	
	269	
	268	
	267	
	266	
	265	
	264	
	263	
	262	
	261	
	260	
	259	
	258	
	257	
	256	
	255	
	254	
	253	
	252	
	251	
	250	
	249	
	248	
	247	
	246	
	245	
	244	
	243	
	242	
	241	
	240	
	239	
	238	
	237	
	236	
	235	
	234	
	233	
	232	
	231	
	230	
	229	
	228	
	227	
	226	
	225	
	224	
	223	
	222	
	221	
	220	
	219	
	218	
	217	
	216	
	215	
	214	
	213	
	212	
	211	
	210	
	209	
	208	
	207	
	206	
	205	
	204	
	203	
	202	
	201	
	200	
	199	
	198	
	197	
	196	
	195	
	194	
	193	
	192	
	191	
	190	
	189	
	188	
	187	
	186	
	185	
	184	
	183	
	182	
	181	
	180	
	179	
	178	
	177	
	176	
	175	
	174	
	173	
	172	
	171	
	170	
	169	
	168	
	167	
	166	
	165	
	164	
	163	
	162	
	161	
	160	
	159	
	158	
	157	
	156	
	155	
	154	
	153	
	152	
	151	
	150	
	149	
	148	
	147	
	146	
	145	
	144	
	143	
	142	
	141	
	140	
	139	
	138	
	137	
	136	
	135	
	134	
	133	
	132	
	131	
	130	
	129	
	128	
	127	
	126	
	125	
	124	
	123	
	122	
	121	
	120	
	119	
	118	
	117	
	116	
	115	
	114	
	113	
	112	
	111	
	110	
	109	
	108	
	107	
	106	
	105	
	104	
	103	
	102	
	101	
	100	
	99	
	98	
	97	
	96	
	95	
	94	
	93	
	92	
	91	
	90	
	89	
	88	
	87	
	86	
	85	
	84	
	83	
	82	
	81	
	80	
	79	
	78	
	77	
	76	
	75	
	74	
	73	
	72	
	71	
	70	
	69	
	68	
	67	
	66	
	65	
	64	
	63	
	62	
	61	
	60	
	59	
	58	
	57	
	56	
	55	
	54	
	53	
	52	
	51	
	50	
	49	
	48	
	47	
	46	
	45	
	44	
	43	
	42	
	41	
	40	
	39	
	38	
	37	
	36	
	35	
	34	
	33	
	32	
	31	
	30	
	29	
	28	
	27	
	26	
	25	
	24	
	23	
	22	
	21	
	20	
	19	
	18	
	17	
	16	
	15	
	14	
	13	
	12	
	11	
	10	
	9	
	8	
	7	
	6	
	5	
	4	
	3	
	2	
	1	

第五章 暗闇の追跡に無言の同勢

1 計略のジグザグ

2 オーステルリツツ橋に車が通るの

3 はありがたい

4 一七二七年のパリの地図を見よ

5 盲滅法の逃走

6 ガス灯がついていたらできなかつ

7 たろう

8 謎のはじまり

9 謎のつづき

10 謎は深まる

6 鈴をつけた男

7 ジャヴェールがえものを見つけそ

8 こなつたのはどういうわけか

Les Misérables

by

Victor Hugo

レ・ミゼラブル

(I)

法律と風習があるために、社会的処罰が存在し、文明のただなかに人工的な地獄をつくりだし、神意による宿命を人間の不運でもつれさせているかぎり、また貧乏のための男の失墜、飢えのための女の堕落、暗黒のためのこともの萎縮という、現世紀の三つの問題が解決されないかぎり、またあちこちで社会的窒息が起こりそうであるかぎり、ことばをかえて、もっと広い見地に立って言えば、地上に無知と悲惨がある以上、本書のような性質の本も無益ではあるまい。

一八六二年一月一日

オートヴィル・ハウスにて

ヴィクトール・ユーゴー

第一部 ファンチーヌ

第一章 正しい人

1 ミリエル氏

一八一五年のこと、シャルル・フランソワ・ビヤン
ヴニユ・ミリエル氏は、ディニーの司教だった。七
十五歳ぐらいの老人で、一八〇六年以來ディニーの
司教職にあった。

こうしたこまかいことは、これから述べる物語の内
容そのものには少しも関係はないが、この司教区に着
いたころのかれに関する噂や話をこの際述べること
は、なにごとも正確にというためだけであっても、お
そらくむだではあるまい。眞偽はともかく人の噂は、

その人の生涯に、ことにその運命にとって、その人の
おこなうことと同じくらい重要な位置を占めているこ
とが多い。ミリエル氏はエクスの高等法院の評議員の
息子で、身分の高い法官の家柄である。父は、自分の
職をつがせるつもりで、高等法院の家柄ではかなりひ
ろまっていた習慣によって、かれをぐく若いうちに、
十八歳か二十歳で、結婚させた、という噂だった。シ
ャルル・ミリエルは、こうして結婚したあとでも、い
ろんな浮いた話がつきなかつたという噂であった。か
なり小柄だったが、粹で、上品で、才氣があり、風采
がよかつた。生涯のはじめは、社交と色ごとに埋もれ
ていた。大革命となつて、事件がやつぎばやに起こ
り、高等法院の家族たちは殺され、追われ、追いつめ
られ、四散した。シャルル・ミリエル氏は、大革命の
はじめたころから、イタリアに亡命した。その妻は
そこで持病の胸の病で死んだ。ふたりにはこどもがな

かった。その後ミリエル氏の運命はどうなったか？

フランスの旧社会の崩壊、かれ自身の家庭の没落、一七九三年の悲劇的な光景、ただただ恐怖心をつのらせて遠方からながめていた亡命者たちにはいつそう恐ろしく思えたちがいの光景、こうしたことが、世を捨て、孤独に暮らす考えを、かれの心に芽はえさせたのであろうか？世間の大変動のために生活や財産をめちゃめちゃにされてもびくともしなかつた人も、ときにはショックを受けて、気も転倒するような神秘な恐ろしい打撃に、かれはこれまでその生活をしめていた気ばらしと愛欲のさなかに、不意打ちをくらつたのであろうか？それはだれにもわからない。わかつていたことは、イタリアから帰ってきたとき、司祭になつていたということである。

一八〇四年には、ミリエル氏はB（ブリニヨル）の司祭だった。もう年寄りで、まったく引きこもつて暮らしていた。

ナポレオン皇帝の戴冠式のころ、いまではもうなんだつたかわからないが、司祭としてのちょっととした用向きで、かれはパリにでかけた。多くの有力者のなかでも、フェッシニ枢機卿のところへ行つて、教区民のために請願した。皇帝が叔父にあたるこの枢機卿を訪ねてきた日のこと、この堂々たる司祭は控え室で待っていた。そこへちょうど皇帝が通りかかった。ナポレオンはこの老人が自分を物珍しそうに見つめているのに気がついて、振り返つて、いきなり言つた。

「わたしを見つめているあの年寄りは何者か？」

「陛下」とミリエル氏は言つた、「あなたはひとりの年寄りをごらんになり、わたしはひとりの偉人に拌顔しているわけです。お互に為になりますことでしょう」

皇帝はその晩、枢機卿にこの司祭の名前をきいた。その後まもなくミリエル氏は自分がディニュの司教に任命されたことを知つて、すっかり驚いてしまつた。それにミリエル氏の前半生のことまで伝えられている話のうちで、どれだけがほんとうだったろうか？だれも知らなかつた。大革命前のミリエル家を知つてゐる家庭は、ないといつてよかつた。

ミリエル氏は、小さな町に新しくやつてきた者が受けける運命に見舞われないわけにはいかなかつた。おしゃべりは大勢いるが、ものを考える者はほとんどいなかつた。土地だつた。かれは司教だつたが、いや司

教だったからこそ、こうした運命をしのばねはならなかつた。だが、要するに、かれの名が引き合いにだされる話は、おそらく単なる話にすぎなかつた。噂であり、ことばであり、おしゃべりであつた。おしゃべりというより、南フランスのどぎつい方言でいう「むだ話」であつた。

それはともかく、ディーニュで司教を九年も勤めあげると、はじめのころ小さな町や下層階級の人たちが夢中になつて話の種にした噂話も、あとかたなく忘れられてしまつた。それを話したり、思い出したりする者さえいなかつただろう。

ミリエル氏がディーニュにきたとき、オールドミスのバチスチーヌ娘をつれていたが、これは妹で、十歳年下だつた。

この兄妹の召し使いとしてバチスチーヌ娘と同年の女中がいるだけで、マグロワール夫人と呼ばれ、「司祭どのの女中」というわけだつたが、いまでは老娘の小間使いと司教閣下の家政婦という二重の肩書きをもつていた。

バチスチーヌ娘は、背が高く、顔色は青く、やせて、おとなしいひとだつた。「尊敬すべき」というこ

とばがあらわしている理想そのままの女だつた。女が尊敬されるには、母親らしくなければならないらしいからだ。彼女が美しかつたことは一度もない。神さまに仕える仕事ばかりしてきただその生涯は、いつか彼女に一種の清浄と明るさを与えるようになつてゐた。そして年をとるにつれて、善意の美しさとでもいうようなものが備わつてゐた。若いころやせていた体は、成熟して透きとおるみたいだつた。この透明さは天使を見る思いをさせた。処女というよりはむしろ魂であつた。体が影でできているみたいで、性別がつくだけの肉づきはあるでなく、光をふくんだわずかな物体みたいであつた。大きな目をいつも伏せていて、魂が地上にとどまるための口実といつた風情だつた。

マグロワール夫人は、小柄で、色白で、脂肪質の、ふとつた、せかせかしている老婆で、いつも息切れしていたが、これはよくはたらくせいでもあり、ぜんそくもちのためでもあつた。

着任の日に、ミリエル氏は、司教の地位は旅團長につぐという勅令で定められた儀式で、司教館に迎え入れられた。市長と市会議長が最初に挨拶にきたが、かれのほうも将軍と知事を最初に訪問した。

着任がすむと、市は司教が仕事をはじめるのを待つた。

2 ミリエル氏がビヤンヴニュ閣下となる

ディーニュの司教館は慈善病院のとなりにあった。

司教館は石造りの広い美しいやかたで、十八世紀のはじめにアンリ・ピュジエ司教閣下が建てたものだつた。この人はパリ大学の神学博士で、シモールの修道院長であり、一七一二年にディーニュの司教になつた。このやかたはまことに閣下にふさわしい邸宅であつた。すべて堂々たるふうで、司教の居間、客間、小部屋、フィレンツェの古い様式どおりにアーケードつきの歩廊のある、とても広い中庭、大きな樹木のそびえた庭園などがあつた。一階の庭園に面した長い、りっぱな回廊式食堂へ、アンリ・ピュジエ司教閣下が、一七一四年七月二十九日に、つぎのような人たちを正餐に招いたことがある。それは司教でアンブロン公のシャルル・ブリュラール・ド・ジャンリス閣下、カーチン修道会士でグラースの大司教アントワーヌ・

ド・メグリニー閣下、フランス修道院会長でサン・トノレ・ド・ランの修道院長フィリップ・ド・ヴァンドーム閣下、ヴァンスの司教フランソワ・ド・ベルトン・ド・クリヨン男爵、グランデーヴの領主で司教のセザール・ド・サブラン・ド・フォルカルキエ閣下、そしてスネーズの領主で司教で、オラトリオ会の司祭で、国王の説教師でもあるジャン・ソアナン閣下などであった。以上の七人の司教たちの肖像画が食堂にかかげられ、その記念日である「一七一四年七月二十九日」の日付が、白大理石の板の上に、金文字できみこまれていた。

慈善病院のほうは、小さな庭つきの二階建の、せまくて低い建物だった。

司教は着任後三日目に、病院を見回った。見回りがすむと、院長に自宅へきて欲しいとのんだ。

「院長さん」とかれは言つた。「いま、病人は何人いますか？」

「二十六人です、閣下」

「わたしが数えたらおりですね」と司教が言つた。

「ベッドが」と院長は語をついだ。「くつつきすぎて

「それも気づきましたよ」

「病室は小部屋ばかりで、風通しがよくありません」

「そのようですね」

「それに、日が当たっていても、回復者が散歩するのにせますぎまして」

「そう思いましたよ」

「今年はチフス、二年前には軍隊熱がはやりましてね、そんなときは患者の数が百人にもなって、なんとち処置なしです」

「わたしも同じことを考えましたよ」

「どうにもなりません、閣下」と院長が言った。「あきらめなくては」この会話は一階の回廊式食堂でおこなわれた。司教はしばらく黙っていたが、それからふいに院長のほうをふりむいた。

「院長さん」とかれが言つた。「この食堂だけで、ベ

ットがいくつはいると思いますか?」「閣下の食堂にですか?」と院長はびっくりして叫んだ。

司教は、食堂を見回して目の子算で数えているよう

「二十ははいるな?」とひとりごとのように言つてから、声を高くして「ねえ、院長さん、申しあげますがね、あきらかにまちがっていますよ。あなたたちは五つ六つの小部屋に、二十六人もはいつてある。まちたちのほうは三人で、六十人分の場所がある。まちがっていますよ、たしかに。あなたがわたしの家に住み、わたしがむこうにはいります。わたしの家を明けわたしてください。ここはあなたの家です」

あくる日、二十六人の貧しい人たちが司教館にあり、司教は病院に移った。

ミリエル氏は、その一家が大革命で破産したので、財産がなかつた。妹には五百フランの終身年金があり司教館に暮らして、それだけあれば自分だけの費用にはことかかない。ミリエル氏は司教として、國家から一万五千フランの俸給をもらつていた。病院の建物に住むようになつたその日に、ミリエル氏は、この金額の用途を断然、つぎのようにきめた。かれの手で書かれたメモをここに写しておこう。

わが家の支出をきめるためのメモ

小神学校のために……一五〇〇リーグル（訳注：同一フラン）

修道会……………一〇〇リーヴル

モンディディエのラザリスト修道

会士のために……………一〇〇リーヴル

パリ外国宣教会神学校……………二〇〇リーヴル

聖靈修道会……………一五〇リーヴル

聖地の宗教施設……………一〇〇リーヴル

聖母慈善協会のために……………三〇〇リーヴル

さらに、アルルの同協会のために……………五〇リーヴル

刑務所改善事業……………四〇〇リーヴル

囚人の慰問と救済事業……………五〇〇リーヴル

借金のために刑務所入りしている戸主たる父親の釈放のために……………一〇〇〇リーヴル

司教区の貧しい教師の給料補助……………二〇〇〇リーヴル

オート・ザルプ地方の穀物貯蔵所……………一〇〇リーヴル

貧しい女子の無料教育のためのデイニー、マノスク、シストロン

の婦人修道会……………一五〇〇リーヴル

貧しい人々のために……………六〇〇〇リーヴル

個人的費用……………一〇〇〇リーヴル

計……………一五〇〇〇リーヴル

ディーニュの司教職についていたあいだ中、ミリエル氏はこの計画にはほとんど変更を加えなかった。前述のように、かれはこれで「わが家の支出をきめた」と言っていたのである。

この計画を、バチスチーヌ嬢は絶対服従で受け入れた。この聖女にとって、ディーニュの司教どのは兄であると同時に、彼女の司教であり、性質からみて親友であり、教会からみれば目上であつた。彼女はかれを愛し、頭から尊敬していた。かれが話ををするときは黙つてうなずき、かれが行動するときは協力した。女中のマグロワール夫人だけは、少しぶつぶつ言つていた。前述のとおり、司教は私用に千リーヴルしか持ておかなかつたので、バチスチーヌ嬢の年金をたしても、年に千五百リーヴルにしかならない。この千五百リーヴルで、ふたりの老婦人とこの老人が生活していたのである。

それでも、村の司祭がディーニュにきたときなどは、マグロワール夫人のきりつめた節約と、バチスチーヌ嬢の頭をはたらかしたやりくりのおかげで、司教は客をもてなすことができた。

ある日、——ディーニュへきて三カ月ほどたつてか